

岳書のたより

第33号
2026
February
題字 瀧島 清

わたしの宝物

誰にでも大切にしている事物の一つや二つはあるのではないのでしょうか。わたしにもあります。極め付きが。それはまさに、“珠玉の宝物”と書いていいかもしれませぬ。以下、その入手をめぐる動機や、経緯を記します。

【ヘルマン・プール夫人オイゲニエさん親子との出会いとサイン本】

わたしは、登山者としてほんの“駆け出し”のころから、ヘルマン・プールに憧れを抱くようになりました。たしか、瓜生卓造の小説『単独登攀』(朋文堂・1957)をBCで読んだことがきっかけだったように思います。

……アルプスでの目覚ましい登攀記録の数々、ナンガ・バルバット単独無酸素初登頂。クルト・ディームベルガーさんとの邂逅。つづいてブロード・ピークのポータレス(事実上のアルパインスタイル、二つとも8000メートルの末踏峰)による登頂。マルクス・シュムックとフリッツ・ヴィンターステラーが無名峰(現在はスキルブルムと呼ばれている。7360メートル)初登頂に成功し、ブロード・ピークBCに戻って来ると、本来の調子を取り戻したプールは6月26日、クルトさんとラッシュで挑んだ花嫁の峰チョコゴリザの頂上直下で悪天に見舞われ翌27日、一時撤退中に稜線上の雪庇の崩壊を引き起こし行方不明。そして何よりも、“ヘルマン、チョコゴリザで遭難”という地獄の死者からオイゲニエさんに届けられた寝耳に水の衝撃的であまりにも残酷な悲報……。

1996年夏、ラムサウ(ドイツ南東部のベルヒテスガーデン郊外)で、民宿ハウスプールを営むプール夫人

を訪問する機会がついにくぐつてきました。しかも幸運にもその場でプールの次女、シルビアさんにも会うことができたのでした。持参したプールの名作『八〇〇〇メートルの上と下』(横川文雄訳・三笠書房/1974)の中表紙に書いてくれたのが二人のサイン(註1/写真撮影・西本)。

“久恋”の人にお目にかかれたうれしさに胸をパンパンにふくらませてホテルに帰った記憶はいまも鮮明です。以後、二人との会見記とサイン本は門外不出の宝物になりました。詳細は拙著『人と山』(桐書房/2015・10)参照。以下同じ。



右:オイゲニエ 左:シルビア



『八〇〇〇メートルの上と下』



マルクス・シュムック『ブロードピーク』



二人のサイン

目次

◎わたしの宝物・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1	◎中野理寸描(余録)・・・・・・・・・・・・・・・・	12
◎図書紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5	◎岡野金次郎と小島烏水の時代・・・・・・・・	14
◎図録で楽しむ山岳文化の一端[その1].....	6	◎私の岳書探訪一平ヶ岳をめぐる澤と銀山平.....	16
◎山の文学・芸術茶房よりーその3.....	10	◎地域のたより・編集後記・・・・・・・・.....	22

地域のたより 読売新聞山形版「インク壺」投稿(転載)

井上 邦彦

登山 先達の蔵書に思う (2025年12月9日)

休校の冷え切った教室の中、冬山登山の防寒具に身を固め、書籍の入った重い箱をテーブルに運び、1冊ずつタイトルや著者名をパソコンに入力する。テーブルの上は、本から剥がれた薄茶色の紙片が散乱している。昭和10年代から20年代に出版された書籍の多くは紙質が悪く、酸化しやすい。本をこれ以上の劣化から守るにはいくつかの方法がある。私たちは危ないと思える書籍を専門店から購入した中性紙の封筒に入れる、という簡便な方法を採用した。

県山岳連盟顧問であった清野孝さんは、斎藤一男氏から託された登山関係の書籍約3000冊を「斎藤文庫」と名付けて自宅で管理していた。昨年の秋に病気で亡くなる直前、書籍の散逸を恐れた彼は小国山岳会にこの文庫を委ねたのである。

小国町の厚意により、来春開設される「次期総合センター」の図書室に「斎藤文庫」を収納してもらえることになった。その準備として、休校舎に運び込んで山岳会の仲間と書籍の目録を作成しているのだ。

表紙の文字が消えた本は奥付を見るが、本をめくる途中で手が止まる。この本を読みたいという誘惑に負けそうになるが、それでは作業にならない。ぐっとこらえてパソコンに集中する。

登山愛好者の中には書籍収集癖を持つ人が少なくない。登山は自然そのものをフィールドにしているが、

読書は登山の楽しみを増幅してくれる作用がある。

小国町に隣接する新潟県関川村に、藤島玄氏が集めた書籍を保管している「藤島蔵書」がある。藤島氏は山岳集成図を作成し、それまで信仰登山と狩猟の場所であった飯豊連峰に近代登山を紹介した文筆家である。蔵書には地域の資料が充実している。

斎藤氏は、山岳文化研究者だが、山学同志会を率いて精鋭的な登攀(とうはん)を切り開いた登山家でもある。斎藤文庫を整理していると、山岳文化を代表する著名本に加え、登攀記録が書かれた会報や部報も目につく。彼の好みなのかもしれない。

先日、飯豊山の山小屋で一緒になった青年は、ネットで人手したという「俺の飯豊山」をザックに忍ばせていた。この本は私が敬愛してやまない藤田栄一さんの代表作である。この青年、藤島氏や藤田さんとは一面識もないのに、実に熱く「藤島蔵書」や「俺の飯豊山」について語ってくれた。ふと、彼にこの斎藤文庫を見せたらどんな感想を持つだろうかと気になった。

最近では自分の山行記録を画像と共にSNSで公表している登山者が多い。しかし一過性ではなく、手間暇をかけた1冊の本にはSNSと違う趣がある。私が斎藤氏や藤島氏、藤田さんの足元にも及ばないことは確かでも、いつか自分なりの1冊を仕上げたいと、寒さで震える指先を息で温めながら思った。

(飯豊朝日を愛する会副理事長 井上邦彦)

編集後記

★ 西本さんの原稿は8月下旬には受領していたのだが、他のメンバーからの原稿がある程度集まった12月下旬から編集作業を始めたため校正依頼は年明けになった。しかし、西本さんは現在体調を崩しており、直接校正を行うことが難しかったため、奥様のご協力で口頭で確認していただいた。もっと早くに編集を始めていればと反省しきりです。

★ 2025年文献分科会の定例集会は前年同様4回(1月・5月・10月・12月[忘年会兼務])行い、本誌『岳書のたより』は計画どおり2回発行することが出来た。ただ、従来行ってきた文献資料探査会等は実施出来なかったのは残念だ。2026年は上記「地域のたより」で記された山形県小国町の「次期総合センター図書室」の見学が可能であるなら清野さんの墓参を兼ねて周辺の施設などを含めた探査会を計画したいと思う。

★ 皆さん、いつも同じことばかりで恐縮ですが「図書・文献等の蒐集・調査・研究の合い間に野外に出て山と自然を楽しみましょう」(中)

☆ 岳書のたより原稿募集 ☆

『岳書のたより』は文献分科会会員の山岳文献に関する調査・研究の発表の場として、また会員の情報共有・情報交換等のために発行している分科会レポートですが、学会会員の投稿も大歓迎です。投稿を希望される場合は下記担当者までご連絡ください。また、山岳書を寄贈いただければ分科会で紹介します。

E-mail : jamc0047@yahoo.co.jp (中岡)

hiroko.takasaki@sky.plala.or.jp (高崎)

文献分科会では常時会員を募集しています。山岳文献に興味のある方、一緒に勉強をしたい方、是非ご入会ください。年会費は2,000円です。

発行 日本山岳文化学会 文献分科会

(代表) 中岡 久

〒343-0807 埼玉県越谷市赤山町2-38-9

TEL&FAX 048-962-1295

郵便振替口座 00160-8-60775

加入者名 中岡 久